

文学部図書室紹介

シリーズ「京都大学図書室巡り」



文学部の図書室は1997年度に建った文学部新館の地下一階にあります。図書室（館）が地下にあるのは図書館建築としては比較的珍しいものです。比較的珍しいものではありませんが、決して今までにまったくない構造というわけでもありません。たとえば、2002年度開館予定の国立国会図書館関西館（仮称）の建物も、そのほとんどが地下におかれる設計になっています。

新館ができる以前は、文学科・史学科・哲学科の三つに分かれていました。1992年の2月、ある新聞社系の週刊誌に「知識の棺桶：大学図書館」という見出しの記事が掲載されました。そこでは、文学科の書庫が収蔵能力を超えて収納しているのに、震度4程度の地震で書庫の床が抜ける可能性がある。また、雨漏りもはなはだしいため貴重な図書が水浸して損壊する可能性がある。このため、収容能力を超えた10万冊の図書をダンボール箱に梱包し、学内某所に積み上げて利用できなくしていると紹介されました。この記事が、現在の新館建築に影響をあたえたものかどうか分かりませんが、関係する人のなかには頭が痛いといっている人もいたとか聞きました。

新館の完成とともに、三つを統合して現在の図書室となりました。閲覧席は約100席、書庫は地下1、2階にあり収容能力は68万冊あります。現在の蔵書冊数は約82万冊ですので、計算上はすでに書庫は満杯ということになります。実際には、貸出中の図書もたくさんあり後5～6年くらいは大丈夫だろうということです。せっかくの新館も、10年ももたないのではちょっと情け

ない話ではあります。

文学部の始まりは、1906（明治39）年の京都帝国大学文科大学の開設に遡ります。以来94年間の長い年月をかけての資料収集の結果、文学部では貴重な資料をたくさん所蔵しています。その中には文庫という形のコレクションもありますし、必ずしも文庫という形でまとまったものでないものもあります。現在、文庫と呼ばれているものは30あります。この中には、哲学の西田幾多郎、画家の須田国太郎など一般にも広く名前の知られた人の旧蔵資料も文庫となっています。

その文庫の中に、1916（大正5）年から1934（昭和9）年まで文学部英語学英文学講座の外国



人教師であった Edward Bramwell Clarke 氏の旧蔵図書もあります。このクラーク氏は1874（明治7）年に横浜で生まれ、英国ケンブリッジ大学を卒業後、

1897（明治30）年慶應義塾の語学教師として再来日しています。この時、慶應の学生にラグビーを教えたのですが、これが日本のラグビーの始まりだとされています。

現在、文学部ではカード目録を、OPACで検索できるようにコンピュータに入力しています。本年度の事業ではこのクラーク文庫の目録などを電子化しています。簡体字の図書も、国立情報学研究所のシステムが対応できるように更新されましたので、今後は中国書もコンピュータで検索できるようになってゆくでしょう。

（文学部整理掛長 渡 邊 誠）